

「底が突き抜けた」時代の歩き方 534

自分の人生をどう「展開」するのか、それが肝心ではないか

作家の高橋源一郎が連載『ニッポンの小説 第15回』（『文学界』06・3）で、現代詩作家の荒川洋治の、「展開とは作者が好きなようにすることではない。作者がつくりあげたこと（それはそのときから読者のもの）から目をはなさないことである。そうなれば線路はつづく」という文章に触れて、《小説というものは、要するに「線路はつづく」でいいものなのだ。ということは、小説家の仕事は、線路を敷いていくもの、ただそのことをすればいいことになる。ここから先は、「具体」の話だ》と述べ、「ニッポンの小説」の典型的な文章について荒川氏がこう説明していることを取り上げる。

「といった文章から流れるものは抒情であるが、その先がない。彼らが何をしているのか、こちらにはわからない。わからなくてもいいが、わからないことに興味をおぼえない。それは展開がないからだ。展開すれば、たいていのことは興味となる。小説の展開については、文芸の知識によらずに誰でも考えることができる。できごとを書き、できごとの進行を書く。前に出したことをあとで忘れないようにする。読者と共有の場をつくり、それがかたまったところで、この小説は最低、何を書けばいいのかを考える。これだけのことである。展開がなくなったのは小説を書く人が自分の小説について考えなくなったからだと思う。小説を書く人が小説を知らなくなったといえはいいすぎだが、そのようなことは小説だけではなく、あちこちの世界で起こることなので、自分にもすでに起こっていることかもしれないと考える必要はある」

この説明を、高橋氏は次のように受けとめる。

《これは、文章についての説明ではなく、また、小説についての説明でさえない。一言でいうなら、もっと大きなものについての説明だ。そのことを、ぼくたちは感じなければならない。

重要なのは「小説を書く人が小説を知らなくなった」ということではなく（そのことも重要だけど）、「そのようなこと」が「あちこちの世界で起こる」ことだ。

「ニッポンの小説」の文章から、「展開」がなくなった、と荒川さんは書く。では、なぜ、「展開」がなくなったのか。それは、世界（社会）から、「展開」がなくなったからだ。なぜ、そんなことが起こるのか。それは、小説（の文章）というものには、世界（社会）が浸透しているからだ。

小説家は、なかなか認めたがらないが、小説（の文章）というものは、その小説（の文章）が生きている世界（社会）に、深く、深く、影響されている。小説（の文章）が、世界（社会）に影響を与えるのではない。その逆だ。世界（社会）が変われば、小説（の

文章)も変わる。どんどん変わってゆく。それ故、たった一つの小説(の文章)を読みさえすれば、いま、世界(社会)がどんな変化のただなかにあるかを知ることさえできる。ぼくは、それこそが、小説というものの、なにより優れた性質だと考えるのである。》

世界(社会)の記述の仕方については、宮台真司流に言えば、そうではない。世界はコミュニケーション可能な領域(社会)よりも、ディスコミの領域を含むが故に、大きい。人間は社会の外でも生きられるが、世界の外では生きられないといってもよい。もう一つ、《小説(の文章)が生きている世界(社会)に、深く、深く、影響されている》ことは確かだが、だからといって、《世界(社会)が変われば、小説(の文章)も変わる》わけではない。どの水準で変わるかだが、基本的には世界(社会)の変化を小説(の文章)が受け入れて、自体も変わろうとしないかぎり、変わらない。世界(社会)が変わっても、人間が変わらないのは世界(社会)の変化をなかなか受け入れられないからだ。

「小説を書く人が自分の小説について考えなくなった」ために、「展開がなくなった」ということは、小説家が自分の小説を見失ってしまったということである。自分がこれまでどんなことを書いてきたのか「から目をはなさな」ければ、次になにを書けばよいのかが自ずから立ち上ってくる。小説を書くなかで小説がみえなくなってしまったのであり、小説を書く時間よりも小説について多くのことを考える時間のほうが大切である、ということから遠去かってしまったのだ。《「ニッポンの小説」の文章から、「展開」がなくなった》のは、荒川氏が言うように、「小説を書く人が小説を知らなくなった」からであって、《世界(社会)から、「展開」がなくなったから》ではない。《世界(社会)から、「展開」がなくなっ》ても、小説(の文章)は「展開」を持つことができる筈だし、持たなくてはならない。そのことにおいて《世界(社会)に、深く、深く、影響されている》小説(の文章)はまた、世界(社会)に影響を与えていくにちがいない。

《小説のことを小説家が知らなくなったのは、小説について考えなくてもよくなったからだ(あるいは、なにごとについても、めんどくさいことは考えなくてもよくなったからだ)。(小説について)考えなくてもよくなったのは、慣れたからである。はじめの頃は、違った。読者は少なく、その中に、怖い読者がいた。それは、同業者だったりもした。昔は、分業も進んでいなかったのだ。同業者や、読者が、しょっちゅう、仕事を覗きにきた。そして、あれこれ文句をつけた。あんた、なに書いてんの? なんのために? それ、なに? 小説というものは、書くだけではなく、それについて考えるものだ、というのは当然のことだった。

やがて、分業が進み、小説家と読者の距離はどんどん開いていった。いまは、どうか。

考え(たく)ない小説家が、考え(たく)ない読者のために、小説を書く。誰も、列車に乗って、遠くに行きたいとは思わないのだ。

繰り返していわねばならないのだが、それは、ひとり小説家の罪ではない。世界がそのように進んでいるからだ。世界で、「展開がない」や「考えない」が進行しているか

らだ。そのことに目を向ける小説家と、目を向けない小説家がいる。もちろん、目を向けたからといって、どうなるものでもない。小説家の仕事は、「文章」の中にあるからだ。「展開がない」や「考えない」に抗わなければならない。それを「文章」の中で行わなければならない。

小説（の文章）に、世界（社会）が入り込んでくるのは、いいことだ。外側の風や声に耳を澄ませるのだ。聞きたくないことも聞かねばならないのだ。そのことによって、小説（の文章）は鍛えられる。

けれども、同時に、世界（社会）の風向きに流されることを警戒しなければならない。その内容にではなく、その「文章」にこそ、世界（社会）の圧倒的な力が及んでいることに警戒しなければならないのである。》

小説家が「自分の小説について考えなくな」れば、一体、誰が自分の小説について考えるというのか。《考え（たく）ない読者》を当てにすることはできない。自分の小説ぐらい自分で面倒をみろ、ということだ。しかし、小説家が「自分の小説について考えなくな」る傾向が加速している。なぜか。《世界で、「展開がない」や「考えない」が進行しているからだ。》そうであるなら、小説家はより一層、「自分の小説について考えなく」てはならない筈である。もし、《世界で、「展開がない」や「考えない」が進行している》ことによって、小説家も自分の小説に対してそうなってしまうのなら、なんのために小説を書くのかが真剣に問われなくてはならない。少なくともそこには小説を書く根拠は全く見出されない。

ここでは「小説の展開」について語られているが、本当は「人生の展開」について語られているのである。だから、小説の「展開がなくなったのは小説を書く人が自分の小説について考えなくなったからだ」という指摘は、誰もが自分の人生について考えなくなったから、自分の「人生の展開」がなくなってしまった、というように受けとめなくてはならない。なぜ、自分の人生について考えなくなったのか。《世界で、「展開がない」や「考えない」が進行しているからだ。》だが、たとえ世界でそのように進行していたとしても、世界の所為にすることはできない。自分の人生に対しては自分が責任を持つほかない。誰も他人の人生について考えることはできないからだ。小説（の文章）について（のみ）語られているなら、小説家にしか見向きもされないが、人生について語られている拡がりがあるところに認められるなら、自分の人生を生きるすべての人々に届けられなくてはならない言葉としての意味を帯びてくる。

「展開とは誰でもが好きなようにすることではない。自分が生きてきたことから目をなさないことである。そうなれば線路はつづく」、つまり、人生は展開される。人生によって人生が展開されていくということが、最重要で最大の課題ではないのか。人生が展開されていくなら、小説の展開などどうでもよくなってしまいが、人生の展開は小説の展開においても可能となるものだ、ということを知らなくてはならない。この「人生の展

開」という角度から、宮台真司が『Voice』（06．3）で取り上げていた、「現実の性愛には実りが無い」とする現代の若者たちの「脱社会的」な感受性に踏み入ってみたい。

「現実には実りが薄い」というとき、それは希薄な現実のなかでは自分の人生は展開できない、ということの意味する筈だ。では自分の人生をどこで展開するのか。濃密なゲームの世界のなかでだ、ということではない。ゲームの世界がたとえ濃密であっても、自分の人生がそこで展開できるなどとはたぶん彼らは誰一人思っていないだろう。そうなると、現実の希薄さのなかで誰にとっても自分の人生というものの展開は断たれてしまうのだろうか。いや、そんなことはありえない。現実が希薄であっても、自分の人生の展開にとって不可欠な関係の濃密さはつくりだせるからだ。

宮台真司は先の文章のなかで、「腹を括って『まったり』生きる」ニートにこう言及している。《フリーターにもニートにも、「追い込まれた」ネガティブなもの「あえて選ぶ」ポジティブなものがある。定職のない彼らには共通性がある。まず、学業不振やイジメや教師との相性で中高時代に学校に溶け込めなくなる。それで「レギュラーな」ライフコースは無理だと思うようになり、ジモティ（地元の仲間）とつるんでバンドやダンスに勤^{いそ}しむ。フリーター人生やニート人生の始まりだ。

彼らの多くは夢を言い訳にするが、それと噛み合って「将来はプロに」という類の夢を売り物にする「専門学校システム」が拡がる。数年すると夢が実現しないことを悟るが、もう「レギュラーな」コースに戻れない。

こうしたポジティブからネガティブへの追い込まれはよくないと、私は十年前から問題にしてきた。だが、今世紀に入って事情が変わった。「専門学校システムが夢を売ることで、不安な若者を馴致する」実態を、彼ら自身が自覚しはじめる。そのうえで、「俺はバンドさえあれば構わない」という具合に、優先順位を明確化したうえで、「レギュラーな」コースを外れる者が増えてきた。

「もう戻れない自分」の事後的正当化という可能性もあるが、不安でオロオロするよりはよいだろう。「定職をもたない連中に個性化志向が強い」というデータも、個性化教育がフリーターを生んだのではなく、背後にそうした事情がある。

腹を括って「まったり」生きる彼らは、「レギュラーな」ライフスタイルに固執しない。大学で就職活動を積極的に行なわない者が増えてきたのも同じ流れだ。だから、かつてと同じ基準では内定率や失業率を論じることはいできない。十年前に私が「まったり革命」と呼んだこうした動きは中高の受験校の一部にも及ぶ。「いい学校・いい会社・いい人生」をめざして過剰に頑張る者を、かつてと違って「イタイやつだ」と見下すのだ。

年長世代は認めにくいだろうが、若い世代には「この社会」の風景が年長時代と違って見えている。「レギュラーな」コースには実りが無いというのだ。認めたさを若者フォビアに基づくバッシングで溜飲を下げる方向ではなく、どんな人生がいか、どんな社会がいかをめぐるコミュニケーションに繋げなければ、それこそ実りがなからう。》

フリーターやニートとは「レギュラーな」ライフコースを逸脱した若者たちであり、もちろん彼らのなかには「レギュラーな」コースを歩みたかったのに歩めなかった者と、コースを元から諦めた者と、どちらかといえば積極的に選ばなかった者が混在している。それらの数字の比率は明らかではないが、いずれにしろ、彼らの多くは《もう「レギュラーな」コースに戻れない》。それは、彼らに戻ろうとする意欲が欠けているからだけでなく、それ以上にもう戻れなくしている社会システムの問題でもある。日本の社会が「総中流意識」に覆われている頃は、戻ろうとすればいつでも戻ることができた。だが新自由主義的な市場万能主義が浸透するなかで、戻りたくても戻れない社会になってしまったのだ。弾力性がなくなり、硬直化する社会のなかで、一度「レギュラーな」コースを外れると、もう戻ることは困難になった。

「もう戻れない」ということは、若者たちにどちらか二つの途の選択を迫っていることになる。「もう戻れない」ことをネガティブに捉えるのか、それともポジティブに捉えるのか。つまり、「もう戻れない」ところに追い込まれているとして、その状態に留まったままではいるのか、「もう戻らない」ところにむかって歩を進めるのか、が迫られていた。前者は「もう戻れない」のに、「もう戻らない」自分を掌握できずに《不安でオロオロする》ことになるだろう。「レギュラーな」コースを外れたことに対する悔恨の情に駆られているために、彼らはいつまでも「レギュラーな」コースのまわりを回りつづけるしかなくなる。だが、「もう戻らない」ことを覚悟した者は、《「俺はバンドさえあれば構わない」という具合に、優先順位を明確化したうえで》、自分のほうから「レギュラーな」コースを敢えて逸脱しようとするのだ。

《「定職をもたない連中に個性化志向が強い」というデータも、個性化教育がフリーターを生んだ》ことを説明するものでは全くなく、その逆に「レギュラーな」コースからの逸脱を積極的に選択し直した者は、どのようにして自分の人生を生きていくか、についてたえず鋭敏でありつづけるライフスタイルの確立を迫られているが故に、個性的にならざるをえないということだ。彼らこそ、《腹を括って『まったり』生きる》者たちである。彼らが《「レギュラーな」ライフスタイルに固執しない》のは、現実の関係には実りがないとみなす若者が蔓延しているように、彼らもまた、《「レギュラーな」コースには実りがない》とみているからだ。「レギュラーな」コースを中心軸にしてしか、社会との関係をみることができない年長世代とはその点が決定的に異なっている。彼らのような若者が出現するに至って初めて、「レギュラーな」コースも単なる選択肢の一つでしかないという人生の視点が生みだされつつあるといえるかもしれない。

現実の希薄さが「レギュラーな」コースを進んでかたちづくられた、「レギュラーな」ライフスタイルに基づいていることは間違いのない。要するに、「レギュラーな」コースもライフスタイルも希薄であるということだ。したがって、《「レギュラーな」コースには実りがないという》ことは、そのコースには魅力がないということである。「レギュ

ラーな」コースから外れた生き方は安心度が低下するけれども、安心度が高いというだけではもはや「レギュラーな」コースが魅力的ではありえなくなっているという事態がここに示されているとみられる。年長世代の《認めがたさを若者フォビアに基づくパッシングで溜飲を下げる方向ではなく、どんな人生がいいか、どんな社会がいいかをめぐるコミュニケーションに繋げなければ、それこそ実りがなかろう》と宮台真司が言うとき、「レギュラーな」コースを基準にした考えかたではなく、自分の人生を「展開」していくうえに立って、さまざまなコースに向かい合うことが求められるようになっていくということだ。

もちろん、自分の人生の「展開」にとって《どんな社会がいいか》、その社会を目指すにあたって我々はどのようなコミュニケーションを繰りひろげる必要があるか、を考えなくてはならないとして、宮台氏は《いまの日本が「自立支援」と呼ぶもので、自己決定的な社会参加を奨励する》ありかたについて疑問を呈し、こう批判する。《「参加意欲をもつ者を手当てします」と呼び掛けても、参加しない若者が大量に出てきたのだ。参加がないと「自分たちでできることは自分たちで解決する」ことも不可能だ。ニートの概念は、「第三の道」を挫く「参加しない若者」を指すべく英国で生まれたのだった。」「参加意欲をもつ者」への呼びかけが座礁するのは、参加意欲を持たない者が予め排除されていることを考えるなら、当然の帰結といえよう。参加意欲を持つのに参加を拒否されてきた事態が、参加意欲そのものを根こそぎにしてきたことに考えが及ばないことのほうが不思議なのだ。

「参加意欲を持つ者」が参加を拒否されているような社会への参加を国家が呼びかけること自体、自家撞着である。本来なら国家の呼びかけは、参加意欲を持たない者のところにまで下りて行って、「参加意欲を持つ者」まで参加を拒否してきた社会の改革への呼びかけでなくてはならない。そうでなければ、《参加支援といっても、どんな社会への参加を支援するのか。実りなき社会への参加を放棄するのも、幸福追求権上の当然の選択ではないかと。こうした経緯を知れば、参加意欲を示さないニートに、たんに「参加せよ!」と大合唱するわけにいかない。彼らが参加意欲を示せない社会とは何か。そのことの検討を要するのだ》という声が宮台氏から湧き起こってくるのも必然であろう。

モノの豊かさに国民の幸せを求めてきた社会の過渡期から、モノの豊かさが達成された成熟社会へと移行するなかで、国民の幸せも達成されたのかと問われれば、モノの豊かさ＝幸せである限りでは確かにそうだと答えなくてはならなかったが、国民の大半はモノの豊かさによって得られる幸せと、モノの豊かさによって失われていく幸せとを同時に味わっていたにちがいがなかった。やがてモノの豊かさが過剰になるにつれて、人々が望む幸せはモノの豊かさとはかかわらない領域に向けられることになった。宮台流に言えば、人々はおぼろげながらも、《幸せになろうとして、自らを不幸せにするアーキテクチャに加担するアイロニー》に見舞われていることに気づいてはいたが、大量消費

社会では勝者は「仕事での自己実現」を煽られ、《敗者は「消費での自己実現」を煽られ、コンビニ労働を通じた社会参加を奨励され》ていった。宮台真司は人々が〈生活世界〉から切り離されていく希薄さについて書く。

《「役割&マニュアル」が便益を与える〈システム〉——コンビニやファミレスなど——が過剰に拡大し、「善意&自発性」がメインの〈生活世界〉が空洞化すればするほど、幸せを望む者は仕事や消費での自己実現へと煽られがちになる。煽られて〈システム〉に加担、〈生活世界〉を空洞化させ、自分の首を絞めるアイロニーに陥る。

ニートが社会参加一般を拒絶するのでなく、「実りなき社会」への参加を拒絶するのだとすれば、「実りなき社会」とは、「役割&マニュアル」の支配ゆえに人間が入れ替え可能になった過剰流動的な社会——絆なき社会——のことではないか。ニートに「仕事での自己実現」を呼び掛ける者は、自分が「どんな社会」への参加を奨励しているのか自覚しているか。そこには「どんな社会」をよしとするかという、根本価値の検討が欠けていないか。》

ニートが「実りなき社会」を生みだしているのではなく、「実りなき社会」からニートが生みだされているとすれば、ニートに「実りなき社会」への参加を奨励すること自体が自己矛盾にほかならない。宮台真司によれば、《「実りなき社会」とは、「役割&マニュアル」の支配ゆえに人間が入れ替え可能になった過剰流動的な社会——絆なき社会——のこと》だとすれば、《「役割&マニュアル」の支配》とは、自分の人生が「役割&マニュアル」に敷き詰められていて、自らの創意工夫によって自分自身から解放されていく余地がなくなった社会であり、これまで述べてきたことでいえば、自分の人生を「展開」することが困難になった社会である。「自分が自分らしく生きられない」ことが強く実感される社会のなかでは、自分が育てられ育っていくという実感も皆無であるために、自分にとって実りのある社会とは当然思われない。「実りなき社会」は実りなき人間を生みだす。それがニートだと言ってもよい。なぜ、成熟社会は「実りなき社会」に行き着くことになってしまったのか。

《近代化とは何か。産業化を近代化と呼んだり、市民化（共同体の軛を離れて自己決定する者の増大）を近代化と呼んだりする。これらを含め、私の考えでは〈生活世界〉のなかで供給される便益が〈システム〉に置き換えられる過程が近代化だ。

これを人は「便利になる」という。〈生活世界〉が盤石で、誰が「われわれ」なのか疑念がありえない時代、「便利になる」のは「われわれの幸い」で、近代化はよきことに決まっていた。だが過ぎたるはなお及ばざるが如し。〈システム〉が肥大し。誰が「われわれ」なのかわからなくなるほど〈生活世界〉が空洞化すれば、何がよきことかわからなくなる。〈生活世界〉が空洞化すると、内発性&信頼ベースから、不安&不信ベースの社会にシフトする。過剰流動性ゆえに人がマトモに育つ可能性も減る。マトモに育てる教育（規律訓練）のコストが上がり、人がマトモでなくても社会が回るようにする「監視化」や、

快不快に反応する動物としての力が人にあれば操縦できる「建築家的権力化」（冷暖房の温度や椅子の堅さによる客回転率の制御）が進む。マトモさが不要になり、入れ替え可能な動物に人が近づくと、快不快を超えるよきこととは何かがやはりわからなくなる。》

近代化以前の〈生活世界〉には人が満ちていた。家の中でも外でもお互いに協力し合わなければ、〈生活世界〉は成り立たなかったからだ。近代化によって「便利になる」というイデオロギーが、〈生活世界〉に差し込まれることになった。ここで「便利になる」ということは、もはやお互いに協力し合わなくてもやっていける〈生活世界〉になったということである。〈生活世界〉のなかでのさまざまな創意工夫によって「便利になる」のではなく、〈システム〉的に「便利になる」ことであったから、〈生活世界〉に立ち込めていた人いきれは急速に消失していった。お互いに協力し合うことで成り立っていた〈生活世界〉は、近代化がもたらす〈システム〉的な「便利さ」に覆われることによって、お互いに協力し合う人間関係を疎遠にし、〈生活世界〉の空洞化を押し進めていくことになった。

〈生活世界〉の空洞化とは、人々がもはや〈生活世界〉に帰属意識をもたなくなったということにほかならない。いいかえると、人々にとって〈生活世界〉は固有の明確な輪郭をもたなくなった。〈生活世界〉で生きている実感がなくなったということだ。問題は〈生活世界〉の空洞化にあるのではない。〈生活世界〉の空洞化が〈生活世界〉に結集していた関係の空洞化をもたらし、人と人が結合していく意欲や力を削ぐことにある筈だ。社会的な意欲や社会力が個々人のなかで弱まり、社会のなかで生きている感覚が減衰することによって、やがて社会に対する無関心が社会に対する敵対へと突き進むことが起こってくる。もちろん、社会に対する無関心は社会の中の自分に対する無関心であり、社会に対する敵対は社会の中の自分に対する敵対にほかならない。

おそらく社会的な意識が減衰しているために、社会に対する敵対意識そのものも減衰しており、そこで個々人は《快不快に反応する動物》に限りなく近づいていくと宮台真司は指摘する。つまり、人が人としてますますマトモでなくなっていく。快不快への反応が社会的な意識を上回り、《快不快を超える》次元に生きることが一層困難になっていく。おそらくニートとは最も快不快に敏感な者たちであるが故に、快不快に拘束されて身動きできなくなっている者たちであるかもしれない。〈生活世界〉の空洞化→社会的な意識の減衰が個々人を快不快の反応に閉じ込めていくのであれば、そしてニート問題もそこに起因していることを考えるなら、個々人を快不快の反応に閉じ込めるに至る社会ではなく、快不快を超える次元で生きるほうが楽しく思われる社会づくりこそが問われているだろう。《より多くの人間が参加したいと思える社会とはどんな社会かという社会構想（ソーシャル・デザイン）》を宮台真司が問うているのも、そういうことではないか。

近代化によって〈生活世界〉の空洞化が避けられなくなるなら、近代化以降の課題は〈生活世界〉の空洞化をなにによって人々は埋め合わせるのかということになるだろう。

そこに仕事や消費を通じての「自己実現」というイデオロギーが、強迫観念として付け込んでくる。〈生活世界〉の空洞化をなんとかするよりも、「自己実現」によってしか〈生活世界〉の空洞化に耐えられないと思込まれるのだ。かくして「自己実現」を目指すために、各人にその意欲が不可欠となってくる。三浦展『下流社会』は《意欲のなさを「下流」とし、引け目を感じなければいけないかのような風潮を水路づける》点で、《自己実現への煽りと同じだ》と宮台真司は批判する。〈生活世界〉の空洞化に耐えるために「自己実現」を目指さなくてはならないか。そもそも〈生活世界〉の空洞化に耐えなくてはならないか。空洞化を全身に浴びるなかでどう生きるかを考えてはいけないうか。《豊かなポストモダン社会では、自己実現したい者は存分にすればいい。だが、すべての人間が創意工夫をする必要も自己実現をめざす必要もない。それが、〈生活世界〉の空洞化を超越神（宗教的共同性）で埋め合わせる（がゆえに空洞化を放置できる）米国と異なる、欧州的な「自然共同体から選択共同体へ」という再帰性の原理（表現形としての自治と補完の原則）だ。超越神なき国を生きる私たちがどんな選択をすべきなのか。答えは自明だ》というのが、宮台真司の結語である。まず明白なことは、〈生活世界〉の空洞化に耐えようとする「自己実現」の衝動はその空洞化に立ち向かう課題たりえないことだ。ゆえに米国と異なる超越神なき国においては、自然共同体に基づく〈生活世界〉の空洞化は、選択共同体に基づく〈生活世界〉の新たな構築に取って代わられなければならない、ということがそこで語られている。

自然共同体のなかで育まれてきた〈生活世界〉の空洞化が避けられなくなってくれば、共同体を新たに作りだすなかから濃密な〈生活世界〉を生みだしていけばよいのである。〈生活世界〉の空洞化に耐えるために「自己実現」を目指す必要もなければ、空洞化を浴びたまま蹲らなくてもよい。これまでと異なる〈生活世界〉をもう一度築けばよいのではないか、ということだ。意欲はそこで最大限発揮すればよいのである。

これまで選択の余地なく自然なかたちで帰属してきた家族や学校、地域とのつながりが、〈生活世界〉の空洞化として希薄化していくなかで、もし人とのつながりを求めて生きようとするなら、新たな関係づくりが不可欠となってくる。あるがままの関係の希薄さのなかで生きることには耐えられないなら、自分が生きるための関係づくりに着手するしかない。宮台真司の言う《欧州的な「自然共同体から選択共同体へ」という再帰性の原理》とは、個々人がよりよく濃密に生きるためには、それにふさわしい関係づくりに着手して共同体を選択し直せばよいということだ。ただし、そのための条件がある。一つは、新たな関係づくりに着手するための意欲とコミュニケーション能力、それに関係を持続させていく構想力を身に着けなくてはならない。もう一つは、新たな関係づくりを各人が目指すのに障害の少ない社会になっていかななくてはならない。『「ニート」って言うな！』（本田由紀、内藤朝雄、後藤和智共著）のなかで、《援助交際をする人への憎しみのほうが、援助交際をする女子学生よりも危険だ、と思ってい》る社会学者の内

藤朝雄は、《他者が他者であることを尊重する自由な社会》として、《共通の望ましい生き方（共通善）を無理強いされることがなく、それぞれにとっての望ましい生のスタイルと望ましいきずなを生きることができる状態》を構想する。《このような社会状態は、放っておけばおのずからできあがる、というものではありません。一人一人が自由に生き、さまざまな善い生のスタイルときずなを生きる者たちが、たがいに殲滅し合うことなく発展を遂げるためには、しっかりした社会的インフラストラクチャーが必要です。このインフラの役割は、他のスタイルを生きる人に対する攻撃を禁止し、個人の選択と移動の自由を実質的に保証する、といったことです。》

自由が他の自由と衝突し、侵蝕し合うことについて言う。《自由は、人が誇りをもってそれぞれの生を美しく生きるためになくってはならないものであると同時に、多種多様な相容れない生のスタイルを生きる人々が、「なかよく」しなくても共存できるようにする社会の秩序原理でもあります。「存在を許す」自由の秩序は、「なかよく」しなくても安心して暮らせるしくみ》に貫かれていなければならないが、《このような自由の原則を社会に行きわたらせるためには、理念を語るだけではなく、社会政策の具体的な方針を立てる必要があ》る。したがって、具体的な枠組みとして、《人々を狭い閉鎖空間に囲い込むマクロ条件を変えて、生活圏の規模と流動性を拡大すること》と、《公私を峻別し、心や態度を問題にしない、客観的で普遍的なルールによる支配》の二点を重要視して、こう説明する。

《狭い交際圏では人格的奴隷から逃れようがありません。自由に移動できる広い交際圏があってはじめて、ある人間関係が酷いものであった場合に縁を切ったり薄めたりしながら、別の人間関係へ重点を移すことができ》るし、《公私の明確な区別は、職務や認定試験の公的基準に達していれば、私的な感情を売り渡して「なかよく」しなくても身の安全が保証されるという安心感を与えます。この安全保障が、卑屈にならなくても生きていける人格権を保つ最低ラインです。》自由な社会の希求は「きずなをバラバラにするもの」ではなく、セットになって存在している《きずなと自己のさまざまなセットがせめぎあう環境条件が、いかなるものであるか》を考えることが重要である。《自由な社会では、魅力と幸福感による陶太によって、一人一人にフィットしたきずなと自己のスタイルが洗練され進化してい》く。

《リベラルなインフラストラクチャーによる環境の作用は、単に悪いもの（迫害や囲い込み）を排除する効果があるだけではなく。このインフラ条件が可能にする自由な生活環境のなかで、幸福を追求する人々が新たなスタイルを工夫したり、模倣したり、「いっしょにやろう」と誘惑したり、失望して撤退したりする試行錯誤の積み重ねによって、多種多様なきずなと自己のスタイルが生成し、洗練され、繁茂します（試行錯誤的な交錯による生のスタイルの多様化と洗練）。》洗練と多様化を通じた《魅力と幸福感による陶太は、生のスタイルの選択肢空間をますます複雑で魅力的で贅沢なものにして

いきます。このことは愛や信頼や倫理や快樂やきずなに関する、洗練されたスタイルの享受可能性の増大を意味します。生のスタイルを自由に選べる人間は、高貴さや美や愛やきずなの質に関して贅沢になり、自己の尊厳の感覚が染みつき、完成度の低いものをますます愛さなくなります。こうして人間世界と人格は多元的に洗練されていきます。》

《生のスタイルの完成度を高めていく》ために自由が不可欠であり、自由を手に入れていく度合いで生のスタイルが完成されていくといえるかもしれない。そのなかで自分が自分に馴染む状態が出来上がり、幸福感も湧き起こってくる。「確固とした自己」をつくりあげていくプロセスでもあるが、《確固とした自己ができあがっていない者に自由を与えるのは危険だという論もありますが、逆です。大人も子どもも確固とした自己などないからこそ、いつも魅力と幸福感を羅針盤とする自由の旅を繰り返しながら、自由に馴染むスタイルの調節をしつづける必要があります。そしてこの調整によって「たしかな自己」という虚構を、生きるために必要な虚構として成立させることが可能になります。》

さて、《特定の共同体や透明な社会を強制されない自由な生活環境であればあるほど、人は安心して、そして思う存分、他者と共に生きる試行錯誤の旅をすることができ》るとして、そこで《行政は、さまざまな生のスタイルやきずなユニットの魅力による陶太と進化と多様化が十分に展開するような、大枠としての、自由な空間を設定したり維持したりする役割を担》うことが求められる。《行政は、さまざまな生のスタイルやきずなユニットの在りようが、囲い込みや脅しや不安によってではなく、人々が魅力と幸福感による試行錯誤を繰り返した結果であり、また魅力と幸福感による将来の展開可能性に開かれているのであれば、「それでよし」とします》と言う。行政が提供すべきなのは《教育ではなく、ライフチャンス（とセーフティ・ネット）》であり、《環境設計者としての行政の仕事》を円滑に遂行させるためには、市民は市民運動や選挙を通じて積極的に介入していかなくてはならない。

《自由な社会のための環境設計は、活発な民主主義によって支えられ》るということだが、もちろん、現状では「活発な民主主義」は程遠いし、したがって、《自由な社会のための環境設計》という行政の役割も絵空事に等しい。青少年ネガティブ・キャンペーンによって、《奴隸的な強制労働や、戒厳令のような夜間外出禁止や、道徳警察が市民の交際に暴力で入り込むといったことに繋がらないようにしなければなりません》と筆者も強調するように、事態は「自由な社会」とは正反対の社会へと転がりつつある。だからこそ、いま我々はどのような共同体—社会を目指し、構築していかなくてはならないか、を提案する必要に駆られたのだと思われる。机上の青写真にみえようとも、個々人が自分の人生をどのように「展開」していくのかという一点に立ったとき、自分の人生の「展開」が自分を取り結ぶさまざまな関係性の「展開」においてしかありえないなら、宮台真司が示唆する「選択共同体」のその先に、「自由な社会の原理」がイメージにおいて先取りされていく必要があるだろう。

2006年4月9日記

